

会議録（概要）

会議名等	令和2年度 第1回 四街道市特別支援連携協議会		
年月日	令和2年7月7日（火）	時間	14:00～15:30
場所	四街道市青少年育成センター2階 オープンスペース		
出席者	委員 井内委員 岡田委員 星委員 土屋委員 石原委員 寺尾委員 竹内委員 柴崎委員 山本委員 松島委員 木内委員 峯島委員 事務局 能村指導主事 山下指導主事		
欠席者	松浦委員 藤原委員 小和瀬委員 伊藤委員 岡本委員		
傍聴人	1人		
<p>—— 会議次第 ——</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 教育長挨拶 3 座長・副座長選出 会議録の作成について 傍聴について 4 議題 <ol style="list-style-type: none"> (1) 各関係機関・団体等における現状と課題について (2) 四街道市の特別支援教育の現状と今年度の取組について (3) その他：新型コロナウイルス感染症の対応等について 5 諸連絡 6 閉会 <p>—— 会議要旨 ——</p> <p>会議次第に従い進行 能村指導主事</p> <p>4 議題</p> <p>(1) 各関係機関・団体等における現状と課題について</p> <p>座長：議事に移る。議題の1点目「各関係機関・団体等における現状と課題について」、出席の各委員さんからお話をいただきたい。自己紹介を含めましてお一人3分程度でお願いしたい。</p> <p>井内委員：健康増進課では赤ちゃんの頃から色々な検診や相談事項を通して、支援の必要なお子さんの早期発見や保護者の方のお気持ちに沿った支援ができるように努めている。ただ、乳幼児期からの早期発見早期療育ということを言われるが、小さ</p>			

い頃は診断ができない場合があり難しい。特別支援に繋がる子どもの多くは幼稚園などの集団に入って、家族以外の人や他の子どもたちと関わる中で困ることが出てきたところで相談を受けるため、うまく支援につなげ、スムーズな就学につなげていけるように、長期的な視点を持って保護者と関係を作っていけるように心掛けている。また、ことばの相談室の利用者で保護者が希望する方については、小学校の担任の先生へ直接の引き継ぎにも行っている。子どもと保護者の支援が途切れないように関係者の方々と連携して、効果的な対応をしていきたい。

岡田委員：障害者支援課では、障害児福祉計画の策定年度であり、その中で、障害福祉サービスの利用率を定めている。サービスの中で放課後等デイサービスが高く、5年で2倍ぐらい利用率が増えており、なかなか予測が難しい。放課後等デイについてだが、知的障害者の方は療育手帳を取得するのだが、放課後等デイの場合は、医師の診断書のみで利用できる。そのため、お子さんの状態が把握できないケースが多い。手帳取得しない障害のある児童がその後小学校から中学校その先どのように進んでいくか、当課では把握しきれない場合があるので、それが大きな課題となっている。

また、児童福祉の関係で一番課題なのは、児童発達支援センターで、市単独ないし圏域で作るということで、指針が示されているが、なかなか着手できていないので、早急に対応していきたいと考えているところである。

星委員：中央保育所は、定員120名の施設だが、昨今の保育士不足の状況は、公立の施設でも例外ではない。定員いっぱいまで受け入れることが難しく、7月1日現在、入所児童数は113名に留まっている。また、子育て支援センターも併設している他、一時保育事業等も実施しているが、これらについては新型コロナウイルス感染拡大防止の一環として、予約制の導入、利用自由の制限により利用者数を抑える対策をとっている。

特別な支援を要する児童だが、発達を考慮し、1つ下のクラスで保育をしている子がいる。保育士間での情報共有を密にしており、十分な支援ができていると聞いている。

土屋委員：児童デイサービスセンターくれよんは、就学前の子どもを対象に、発達に応じたプログラムとなっており、小集団の適用が可能となるよう療育を積み重ねる施設となっている。親子通所の施設で親御さんにも一緒に来ていただき、お子様の発達状況を見ていただいて、どのように対応していくことで集団の中で適応していけるか、一緒に遊びを通して学んでいただいている場所である。契約者は4月1日現在60人でスタートしており、現在69人の契約者がいる。コロナの感染防

止のため、4月後半は利用の自粛をお願いし、5、6月は1時間の個別プログラムということでやっていた。7月に入ってからは、一部屋の利用人数を制限しまして、小集団プログラムを再開した。8月からは通常プログラムに戻す予定である。利用にあたっては保護者の方もお子様も検温、手のアルコール消毒、マスク着用、各お部屋の消毒、換気等を徹底して、感染防止に努めている。

特別支援教育の連携の中の一つとして、年長児の就学相談がある。昨年度の年長児は13人で、今年度は23人いる。年長児の発達状況を見る検査は、毎年11月の就学時健診に向けて、2月頃からスタートするが、その頃から面談の中で就学についての相談が具体的になる。支援学級と通常学級とで迷っているなど、保護者の方によって思いは様々である。そして11月の検診までに、小児神経科医師の面談と最後の発達検査を実施し、保護者の同意を得た上で、検査報告として、情報提供している。お子様が切れ目なく支援が受けられるよう療育施設としての役割を果たしていければと考えている。

石原委員：つぼみ幼稚園は開園45年目となった。前園長が障害児クラスを作らないと園長を引き受けないという考えだったことから、現在も150人弱の小さな園だが、20人程度の特別支援児の子供たちがいる。軽度から重度の子まで、重複の子もいれば、聴覚障害の子もいて、いろいろ子たちと一緒にみんなで育ち合おうというインクルーシブ教育を実践しているところである。教職員の数は20人以上いて、担当は決めず、みんなで教育している。療育がいろいろな分野で出来てきているので、お母さん達がいろいろなところへ行っていて、お母さん達が目指すものが揺らぎやすくなっている。園のアドバイスと医療の方のアドバイスが少し違っていることもあり、園が話したことも小児科の先生に聞いたらまだ大丈夫だと言われる等、少しずつれが生じることが以前より多くなった気がする。連携の大切さを感じている。特に四街道市の私立幼稚園連合会に7園加盟しているが、私立であるので考え方が様々で、つぼみ幼稚園の場合は特別支援を打ち出しているが、そうでない園もあり、幼児期という時期は大切だが難しいと思うところが多々ある。自分自身も子供達、保護者の方のために一緒に勉強させていただきたいと思っている。

寺尾委員：校長会で特別支援教育担当をやっている。6月1日から分散登校となり6月15日より一斉登校になり、給食が始まっており、5時間6時間となっている。特別支援学級というわけではないが、既往症がある子もいるので、3密を避ける、かつ消毒、本人たちの手洗いをして、コロナにならない、または持ち込まないということを考えている。

竹内委員：千葉県立千葉盲学校は幼稚部から社会自立を目指している 3 歳から 60 歳くらいまで敷地の中で勉強している。

コロナということで三密を避けるなどのガイドラインはあるが、視覚に障害を持った方の指導においては接触や密着を避けることは難しい。そういう中で消毒、マスク着用等をやっている。衛生環境を守らなくてはいけない教育現場であるので、それぞれの障害種でやりにくさがあるが、精いっぱいやっている。

盲学校の生徒は減ってきている。地域の学校のところに入學していると考え。うまく教育相談に乗ったり、通級指導やセンター的機能の役割があるので、そういう形で、アドバイスしたり、情報交換したりできる環境にある子供についてはその後も見守っていきける。しかし、見え方について「今までよく頑張ってきたね」というような子が高校になって、盲学校を受験してくることも実情としてある。そういった中で見えにくさ等があった場合には、気軽に声をかけてほしい。通級も県に一校なので、相談に乗りたいと思っている。

柴崎委員：千葉県立四街道北高校は創立 36 年目の普通科の高校である。本校では、以前からインフルエンザも含めて感染症対策として、消毒、換気等行っている。三密を防ぐ等と言われているが、やれることを徹底してやっていくことが大事であると職員に言っている。

本校では合理的配慮の申請を年度初めに受け付けており、特別な教育的支援計画作成して指導に生かしている。生徒保護者との合意形成を図っている。その他に、年度途中であっても、日頃の教育活動の中で職員から見て、悩みや困り感がある場合等、特別な配慮が必要と感じられる生徒について見過ごさず、職員全体から広く情報や意見を求めて全体で共有を図っている。生徒を指導する上で、職員と生徒間の食い違いや正確な情報がないがゆえに起こりうる誤った指導が起こらないように心がけている。職員全体で丁寧な指導、生徒に寄り添った指導を心がけている。現在、特別支援と教育相談の連携を一層リンクさせながら学校全体でより効果的な指導を目指しているところである。

山本委員：ハローワーク千葉において、昨年度の障害のある方の就職の数は 646 人で、毎年右肩上がりです。障害のある方の就職は増えている。そのうちの半数が精神の方で、身体の方、知的の方で働ける方はもう働いているというのが現状である。会社の方から「障害者雇用と言われた時にどうしても身体の方だと依頼され、現状がわかってないと日々感じている。最近増えてきているのは、障害のある方で大人になってから診断を受けて発達障害となると、学校生活を普通に過ごしてきた、いざ就職してみたら、社会に馴染めなくて、初めて相談したり、支援機関に協力していただいたり」ということがここ何年間か、千葉だけでなく隣接の地域も

含め、同じような状況となっている。そうなる就職はしたもの、定着というものが課題となっている。特別支援学校の卒業生は先生が卒業生をその後も見ていてくれるので、そこで情報共有してわかるが、そうでない方は障害者枠で苦労している方もいて、定着ということが難しい。

現在、コロナの状況の中で、職業安定所を閉めるわけにはいかないが、窓口には薬を服用していたり、感染リスクが高い方も相談を受けているので、感染症対策をしたり、人数を半減したり、電話で相談に応じたりして対応している。毎年 10 月に障害者の面接会を実施してきた。少ない年で 350 人、多い年で 550 人が集まった時に感染リスクを避けながらできるかということで今年は開催しないという方向となった。話を聞きたいという人がいたと思うが、そういうチャンスが少なくなってしまうので、ハローワークができることをやっていこうと動き始めている。引き続き皆様と連携してやっていきたい。

松島委員：平成 29 年要綱改正に基づき、四つの事業が定められた。個別の相談については、包括的相談支援事業という中で受けている。既存の制度にのらない方が相談に来る。全体で 418 ケース、7757 件、電話一本から訪問一件まで相談を受けている。その中で子供の相談 1200 件で、一昨年度は 600 件だったので、2 倍になった。四街道市は 574 件あった。子供のケースでは、発達障害の子が高校に入学したが、なかなか馴染めない等の相談がある。保護者側の対応力も関係してくる。自分達も保護者に対する対応力も身に着けなければならない。一つ一つ難しいケースだが、教育機関、スクールソーシャルワーカー、医療機関、特別支援関係と情報共有をして、スムーズな連携を図っていくことが大切だと感じている。

木内委員：A-の会は、平成 11 年 11 月、知的障害の子供を持つお母さん方の有志で始めた会である。親は子供達と一対一で接していて、病院に通院する等どうしても子どもを連れて歩かないといけないので、本当に厳しい時代だった。少し見てもらえる、少しでも何かしてもらえる等、四街道市に欲しいと思って始めた。A-の会の名前の由来は、その頃子供達は何も言葉を持ってなく、話せている言葉としては「あー」や「いー」等の言葉しかなくて、「あー」という言葉がアルファベットの A で最初の一歩ということで、A-の会ということにした。現在会員は 16 名おり、みんな知的障害の子を持つ母親であるが、みんな大人になった。会としての課題としては、若いお母さんたちの付き合いが全然ないので若いお母さん達との接点を見つけられるといいと思っている。どこかで助けになればいいと思っている。保護者として言える意見があれば、伝えたいと思っている。

峯島委員：指導課は、指導係、サポート室、給食係、3つあり、指導係が 7 名 サポート室

が兼務を含めて3名、給食係が4名と課長で構成されている。指導課もコロナの対応に追われているが、学習面、給食面と市民の方々の注目も高いので一つ一つ丁寧に行っているところである。課題としては、学力向上、そして喫緊の課題として、いじめや不登校の解消、虐待の早期発見等、求められる課題は山積している。そして特別支援の充実も課題として、また柱として掲げている。しかし、現在は、コロナによる休校があり、学びの保障が大きな課題として挙げられている。その中で、特別な支援を必要としている子ども達への支援も非常に重要であるという認識を持っているので、今年度も皆様の力を借りながら、充実した特別支援の推進をしていきたいと考えている。

座長：質問や意見があればお願いしたい。

議題の2に進む。

(2) 四街道市の特別支援教育の現状と今年度の取組について

事務局：事務局より説明 ※資料参考

座長：質問、意見はあるか。

松島委員：4ページの通常学級在籍で特別な支援が必要と思われる児童生徒数とあるが、どのように挙げているのか。

事務局：年度の始め、5月の段階で、各学校から通常学級在籍で特別な支援が必要と思われる児童生徒について挙げていただいている。その数が、小学校が375名、中学校が78名となっている。

松島委員：調査を具体的には、どのように市の施策につなげているのか。

事務局：巡回相談の依頼が来た際、相談員や北総のアドバイザーの方に、児童生徒の情報を伝える等している。

座長：学校としても、このような児童生徒を挙げることにより、学校全体で支援の統一を図っている。

石原委員：通常学級在籍で特別な支援が必要と思われる児童生徒数とあるが、就学支援シートを持つ子が含まれているのか。

事務局：そうである。

石原委員：それ以外に、担任の先生が特別な支援が必要と思われる子ということか。

事務局：そうである。

石原委員：今、通常学級に就学支援シートを持参している子はどのくらいいるか。

事務局：数は把握していないので、確認しておく。

竹内委員：就学支援シートを持っていない子は、教育現場において、担任が少し支援が必要だと思い、挙がってきているのだと思うが、その子は教育支援委員会に挙がらなかったということか。

事務局：そうである。

竹内委員：そこで、中学校になると、78に下がるというのはどうしてか。それは、例えば小学校の時に、もしかすると障害はあるかもしれないが、いろいろな支援を受けて、こうすれば自分にもできるということで、中学校へ行くと数が減るということになっているのか。

事務局：小学校のうちに、その子にあった支援をしてもらいながら、その子自身の成長もあり、困難さへの対応もできるようになり、中学校では特に支援は必要としないという子もいる。

竹内委員：低学年の時は支援が必要だったけど、成長するにつれて、集団生活の中で大丈夫だったという子がいることは想像できるが、375人から78人になるのはなぜか気になった。

事務局：「その他」青い麦の子振興ふれあい運動会について、座長よりお話ししたい。

座長：四街道市は例年、総合体育館に集まって、各学校から集まっていた。しかし、今年は、バス移動等により現在検討中である。運動会はできないので、どうするかということになっているが、例えば中学校区で行うか、または運動会という形で

はなく、発表会等で代替えとして行うかと現在検討している。

事務局：「その他」の2点目。コロナウイルス感染症対策で、各課、施設、学校で、もうすでに対応している話は伺ったが、学校の特別支援学級でどのように対応したらよいかという声が上がっているので、今一度、対応策をお話しいただきたい。

石原委員：幼児期は密があって育つ部分もある。密集、密接等で心が通い合い、スキンシップで育っていくこともあるので、回避というのは難しい。過剰にくっつかないようにすればよいと考える。保護者の方とも対応策について、密に連絡を取り合う。弁当も全く私語をしないで食べるという指導をしている幼稚園もあるが、当園では、特別な支援を必要としている子がいるので、動き回ってしまうし、声も発するので、それをすべていけないというのは難しく、その場その場で対応していくようにしている。

座長：保護者と連携しながら、こういう意図でこういう対応をしていると伝えていくことが大切である。

座長：本日の議題は全て終了した。

5 諸連絡

事務局：第2回特別支援連携協議会は、令和3年2月9日（火）14：00から、第二庁舎での実施を予定している。

6 閉会

事務局：それでは、これで第1回特別支援連携協議会を閉会する。